

まえがき

本書は、「動詞」と「ごくありふれた小さな語」である「前置詞 / 副詞」からできているイディオム（たとえば、**look up a word**）について書かれたものです。みなさんの多くはおそらく、このような動詞と前置詞 / 副詞が形作る「イディオム」（熟語）についてはかなりの数を覚えてきたのではないのでしょうか。

これらは厳密に言えば、「イディオム」とは区別して「句動詞」と呼ばれるものです。しかし実際、「句動詞」という語には何か近寄りがたい、専門的な響きがありますし、英語を学ぶときに、用語についてはそれほど深く考えないでしょう。

たしかに句動詞をそのように考えても少しもおかしくありません。その意味において本書は、英語のイディオム表現の中のあるグループについて書かれたものといえます。

本書において、私は日本人の学習者が遭遇する句動詞の問題点について取り上げ、話を進めてゆきます。たとえば、次のような問題点です：

‘get up, get up to, get down, get down with, get through, get across, get into’ などにおける ‘get’ の意味の違いを、また、こうした句動詞自体が表す実に多くの意味の違いをどのように覚えたらよいか。

あるいは、句動詞のさまざまなパターン（たとえば、‘pick up a pen’, ‘pick a pen up’, ‘pick it up’ のパターンは可能だが、‘pick up it’ は不可）をどのように覚え、使ったらいいのか、といった問題

もあります。

私は本書で、こうした問題点について話を展開し、これまでにない新しいやり方で解決する方法を明らかにしています。寡聞ながら、こうした方法を日本を含めたどの国においても、これまで目にしたことは一度もありません。

さまざまな新しい方法でアプローチすることにより、とかく難しいとされてきた英文法について、みなさんの理解が増すばかりではなく、英語をもっと簡単にしかも自信をもって使うことができるようになると、私は断言します。

本書で読者のみなさんは、長短さまざまな一覧表を目にするでしょう。その多くはみなさんが今まで本書以外では目にしたことがないものだと思います。

これらの一覧表は、学習者が句動詞をマスターできるようにという観点から、時間をかけて練られ、配列されたうえで作成されています。最初はなじみがないものに思えるかもしれませんが、じっくり学んでいただければ、必ずや読者のみなさんが英語を覚え、使ううえで貴重な財産となるでしょう。

本書の刊行に際して、翻訳の労をとっていただいた勝見 務氏に感謝したいと思います。しかしながら、本書の内容に関するすべての責任は私にあります。

2003年9月

クリストファ・バーナード